

2020年6月7日 礼拝説教要旨

詩編講解説教17 「瞳のように守られ」

詩編17：1～9、ローマ8：26～27

第17編には「祈り」という表題が付いています。実は、「祈り」という表題が付いている詩編は意外にも多くありません。17、86、90、102、142編の五つになります。なぜこの17編に「祈り」というタイトルが付けられたのか。こういうことがとても気になるのですが、わたしの手元にありますいくつかの注解書を調べてみましてもそれに関することは記されておりました。結局、分からないわけですが、しかし「祈り」ということを念頭に置きながら、改めてこの詩編を読み直してみた時に、なるほど、この詩編はわたしたちに祈りの本質を教えている。祈りとは何か。それをこの詩編は伝えているように思うのです。

信仰を与えられた者は必ず祈りをします。それだけ祈りはわたしたちの信仰に欠かせない、密着していることなのですが、しかしわたしたちは祈りというものを本当に分かっているのでしょうか。例えば、自分の願い事を一方的に言うことが祈りだと考えていることがあります。世間では「祈願」とも言いますが、基本的にそれは「願い事」であります。願い事ですから自分の願いが中心です。更に踏み込んで言えば、祈りの主体は願い事をする自分です。相手がどんな神であろうと関係ない。叶えてくれるかどうか分からない。それでもいいのです。肝心なことは自分なのです。自分が何を願うか。あるいは自分がどれだけ熱心になれるか。それが祈りの中心になってきます。それが一般的な祈りでしょう。

しかし聖書の信仰において祈りはそれとは正反対のことになります。祈りの主体は自分ではなく、その祈りの対象であるところの神さまです。神さまが重要であって、わたしが何を願うかとか、熱心であるとかは関係ない。マタイ福音書に「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存知なのだ」(6：8)とあります。また「あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない」(7：11)ここに祈りの急所がありますが、わたしたちはすべてをご存知であられる神さまが、わたしにとって最善のものをくださることを期待して祈る。神さまが今のわたしに一番ふさわしいことをしてくださる。それをどうぞ行ってください。そういう祈り。そこには神さまに対する深い信頼があります。そういう信頼のもとに祈る。あるいは信頼の中で祈る。祈りの概念がひっくり返される。

この詩人は祈りの中で自らの潔白を主張しています。重要なことは、この詩人は自分でその潔白を証明しているのではなく、すべてをご存知であられる神さまがわたしを正しいと証明してくださるという信頼があります。「火をもってわたしを試されます」(3節)とあります。これは「精錬する」ということです。この言葉の背後には、人生に起こる試練を考えることができます。興味深いのはこの詩人はそのような試練から逃れさせてくださいと祈っているではありません。その試練によってむしろわたしの潔白が証明されると言っています。これは神さまを信頼しているからこそ出てくる言葉でしょう。試練を嘆き、不平をぶつけるのではなく、この試練もまたわたしの人生に必要な試練として与えられたものと捉えます。

さらにこの詩人は苦境に立たされています。「あなたに逆らう者がわたしを虐げ、貪欲な敵がわたしを包囲しています」(9節) そういう絶体絶命の中で、しかしこの詩人は神さまを信頼しています。その信頼の中にある平安を感じることができる。それがもっともよく表されているの

が「瞳のようにわたしを守り、あなたの翼の陰に隠してください」（8節）という部分です。「翼の陰」というのは、口語訳では「みつばさの陰」と訳します。母鳥がヒナをそのつばさの陰に隠して守る光景があります。弱いものを守る象徴のような言葉です。これは詩編では他にも36、57、63編などに出てきますから、よく知られた言葉でしょう。

もう一つ「瞳のようにわたしを守り」というのは美しい表現ですが、とても意味深い言葉です。友人の牧師がここから自分の子どもに「瞳」という名前をつけました。人間の器官の中で目は弱い部分です。ちょっとほこりが入っただけでも痛みます。そういう弱さの象徴のようなものが目、瞳でしょう。その弱さは人間の本質的な部分を示しています。創世記第3章の人間の墮罪の話を見ると、蛇がこう言って誘惑します。「それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ」（3：5）そして「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた」（3：6）誘惑が目から入る。サタンはそういう一番弱いところを狙うのです。目、瞳はそういう一番弱い部分のことで、そういう人間の弱さを神さまはご存知です。

この「瞳のように守り」という表現は申命記にも出てきます。「モーセの歌」と呼ばれる詩の中の一節です。「主は荒れ野で彼を見だし、獣のほえる不毛の地でこれを見つけ、これを囲い、いたわり、御自分のひとみのように守られた」（32：10）これは出エジプトの出来事を歌ったものですが、ある聖書学者はこの第17編の背景には出エジプトの出来事があると見ています。エジプトを逃れたけれども、前は海、後ろからはエジプトの軍隊が追って来るというまさに絶体絶命の時に、神さまが海を開かれ、救いの道を示されました。まさに瞳のようにイスラエルの民は守られました。わたしたちの人生にも荒れ野を渡っているような時があるのです。今の時代もまさにそうかもしれません。家庭、学校、職場、そこは安心できる場所ではなくなっていることがあります。また病気をしたり、愛する人を失う悲しみに直面することがあります。それはまさに荒れ野の中に置き去りにされたような、すぐ隣には死が命を狙って吠えたけるような状況がそこにある。でも神さまはそこで弱るわたしを瞳のように守ってくださる。その信頼がここにあります。

なぜそういうことが言えるのでしょうか。7節に「慈しみの御業を示してください」とあります。ここは「慈しみを分けてください」と訳すことができます。神さまの慈しみ、それを荒れ野を生きるわたしにも分けてください。あなたの慈しみをここに届かせてください。天から右の御手を伸ばしてわたしを救ってくださいと言っています。それが現実のものとなったのが言うまでもなくイエス・キリストの出来事なのであります。神さまの慈しみが分けられ、その右の御手がこの荒れ野の地上に届いたのです。確かにわたしたちの人生は荒れ野であり、そこに放り出されたヒナのようなものなのかもしれません。でもそこに神さまの御手は伸ばされた。キリストが来られ、十字架でその死の極みまで御手をもって守ってくださることを知るので、みつばさの陰に隠し、瞳のように守ってくださるのです。その時にわたしたちは平安なのです。どんな荒れ野の現実でも、命の脅かされるときも、そこにも神さまの御手は届く。その信頼の中で、ひたすら祈る日々でありたいと願います。